

氏名	はしもとまさとし 橋本正俊
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第298号
学位授与の日付	平成16年11月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	中世仏教説話の展開と和歌・縁起

論文調査委員 (主査) 教授 大谷 雅夫 教授 木田 章義 助教授 大槻 信

論文内容の要旨

本論文は、日本の中世における仏教説話の展開とその特徴について論じるものである。仏教説話とは、仏教に関連して記され、或いは語られた説話の総称である。その中には、説話自体が仏菩薩や寺院の靈験について語るものもあれば、説話自体は仏教とはまったく関わりがなくても、仏教の教義によって解釈されるものなども含まれる。仏教説話の展開について研究することで、それぞれの説話の時代による変化やその背景、影響などを明らかにすることができる。

本論文では、中世の仏教説話について「和歌」と「寺院縁起」の二つのテーマを設けて考察を行う。

第Ⅰ編「仏教説話と和歌—『宝物集』を中心に—」では、仏教説話と和歌との関わりについて論じる。中世には経典や教義を説いて人々を教え導く、「唱導」と呼ばれる活動が盛んに行われていた。そこでは、教義をよりわかりやすく伝え、人々の興味を引くように様々な仏教説話が利用されていたのであるが、同時に多くの和歌も利用されていたと考えられている。本編では、特に『宝物集』という作品を通して、教義を説く上で仏教説話とともに利用されていた和歌の役割について、また仏教説話とともに和歌を引用することが与えた影響について考察する。

第Ⅱ編「寺院縁起の展開とその背景」では、寺院縁起と呼ばれる資料群を取り上げて論じる。寺院縁起とは寺院の草創や沿革について、靈験譚などを交えて記録したものをいう。平安時代以降、各寺院への貴族や民衆の信仰が高まる中、寺院の方でも積極的に自らの宣伝活動を行う必要が出てきた。そのために各寺院で生み出され、成長したのが寺院縁起である。寺院縁起の語り手(書き手)は、寺院縁起によってその寺院が由緒正しく靈験あらたかであることを主張することができたのであり、聞き手(読み手)も寺院縁起によって各寺院への信仰心を高めていたのである。本編では、いくつかの寺院縁起を検討し、それぞれの寺院縁起の変遷とその背景について考察する。

第Ⅰ編「仏教説話と和歌—『宝物集』を中心に—」

第1章「『宝物集』の和歌説話」では、鎌倉時代初期に成立した仏教説話集『宝物集』を取り上げ、そこに引かれる和歌に注目し、和歌が仏法を説く場でどのように利用されていたのかを考察した。

『宝物集』は、まず人々が輪廻する「地獄道」や「餓鬼道」などの六道について説明し、次に六道から逃れて浄土に赴くための十二の方法(「道心を起こすこと」や「戒を保つこと」など)について説明している。この六道と十二の方法は、さらに細かく分けて説明がなされ、それぞれの項目で多数の説話や和歌を例証として引いている。

『宝物集』が引用する和歌は、数首を一群として挙げているものと、和歌説話(和歌を中心に構成されている説話)中で挙げているものとの二種類に大きく分けられる。このうち一群で挙げられる和歌は、その内容がそれぞれの項目の教義と直接関係するものもあるが、例えば鷹狩の歌を殺生の歌として解釈するといったように、本来は仏教とは無関係な四季や恋を詠んだものも各項目の例証となるように留意して配置されているものもある。しかしもう一方の和歌説話中の和歌は、説話の一部として引かれているものであるために、一群で挙げられる和歌と同じように各項目の例証として機能しているのかは疑問である。そこで本章では、男女の乱れた関係(邪淫)を戒める「不邪淫戒」の項目を例に採って、『宝物集』の和歌説

話中の和歌の機能について考察する。『宝物集』は「不邪淫戒」で、恋の和歌を中心とする多数の和歌説話を例証として引用している。これらの和歌説話の扱われ方を分析してみると、和歌説話中の和歌は単に説話の一部として引かれているのではなく、邪淫の例証となる歌としての役割を持たされていることがわかる。他の項目で引用される和歌説話も同様であり、このことから『宝物集』は、それぞれの項目の中で例証となる和歌を集める目的を持って編纂されたことが推測される。

また、『宝物集』は当時の唱導活動の実態を反映していて、引用されている説話も実際の唱導活動で利用されていた説話と深く関わっていることが指摘されている。中世の唱導関係の資料を検討してみると、本章で考察した『宝物集』の和歌や和歌説話も、唱導との関係が指摘できると考えられる。唱導では例証として説話とともに、聞き手に身近な和歌を利用していたのである。『宝物集』からはそのような唱導と和歌・和歌説話との関係を読み取ることが出来るのである。

第2章「日蔵上人蘇生譚と和歌」では、同じく『宝物集』の「地獄道」の項目で例証として引かれる日蔵上人の蘇生譚に注目し、説話と和歌とが結びつくことで、その説話が広まってゆく様子を明らかにした。

日蔵上人の蘇生譚は、もともとは天神縁起の一部である。その内容は、日蔵上人が修行中に頓死して、地獄を見て回る中で死後の醍醐天皇に会い、天皇が生前に犯した罪に対する報いとして地獄に堕ちたことを知った後、蘇生するというものである。しかし『宝物集』は、天神縁起からは独立した日蔵説話のみを簡略に引き、さらに本来はこの説話とは無関係な高岳親王の「いふならく奈落の底に入りぬれば利利も首陀もかはらざりけり」という、地獄に堕ちては身分の高い者も低い者も変わりはないのだ、という意の和歌を併せて引いているのである。「地獄道」の項目で挙げられる説話は、いずれも生前の罪とその報いをテーマとするものであるが、『宝物集』の叙述の流れを見てみると、単にそれだけではなく、ここでは六道を輪廻するこの世の無常が主題となっていることがわかる。したがって日蔵説話も、生前は王位にありながら死後は身分に上下のない地獄にいるという、六道の無常を描いた説話として取り上げられていると考えられるのであり、さらに身分の無常を詠んだ「いふならく」歌と結び付くことで、その主題が強調されているのである。

また、中世の文学作品を見てみると、鎌倉時代の説話集『十訓抄』『沙石集』も日蔵説話と「いふならく」歌を併せて引いている。また、日蔵説話と結びついた「いふならく」歌の影響は大きく、『平家物語』の諸本のうち『延慶本平家物語』『源平盛衰記』に引かれている他、『撰集抄』『発心集』など中世の多くの作品に「いふならく」歌の一部が引かれている。六道の無常について説く際には、しばしば「いふならく」歌と結びついた日蔵説話が引かれていたことが推測される。日蔵説話と「いふならく」歌は互いに結びつくことで、より広く人口に膾炙することになったのである。

第Ⅱ編「寺院縁起の展開とその背景」

第1章「石山寺縁起の形成」では、滋賀県の石山寺を取り上げ、その寺院縁起が形成される過程について論じた。

石山寺縁起は多くの資料に見られるが、特に石山寺蔵『石山寺縁起』絵巻、全七巻が知られている。内容は、聖武天皇が東大寺大仏を鑄造した時、大仏に塗るための砂金が必要となり、砂金を求めて良弁僧正が金峰山で祈ると、近江国湖南の山で祈請するよにとの示現を受け、良弁がそこで観音を安置すると陸奥国より砂金が掘り出されたために、この近江の地に石山寺を建立したというものである。ここからも分かるように、石山寺縁起は東大寺の大仏縁起と深く結びついている。以下にその展開をたどってみると、東大寺大仏縁起を引く初期の資料『三宝絵』（984年成立）には、まだ石山寺の名前も見られず、また金峰山で祈る場面にも石山で観音を造る場面にも良弁の名前が挙がっていない。次に十一世紀末の『扶桑略記』等に引かれる東大寺大仏に関する記録では、本文の途中に付された注に石山寺の名前が表れ、良弁も近江国で祈請する場面でのみ登場している。さらに十二世紀中頃の『七大寺巡礼私記』では一貫して良弁が中心となって話が進み、最後に石山寺の名前も記されている。東大寺の周辺で様々な良弁の伝承が生み出される中で、この石山寺縁起も良弁の靈験譚の一つが成長していったものと考えられる。

東大寺の末寺としての地位にしかなかった石山寺にとって、良弁の説話はその由緒を説くために見逃すことのできないのであり、これがやがて独立した「石山寺縁起」へと発展してゆくこととなった。他の多くの寺院縁起も、特定の主人公を中心に据えて、その人物の靈験譚として縁起を形成してゆくのが一つの方法であった。

また、中世以後石山寺縁起の導入部分として、良弁と聖武天皇は前世に修行者と渡し守であり、金銭が無く川を渡れなかった修行者を渡し守が無償で渡した、という説話が広まった。これも縁起と同じく東大寺周辺で発生した良弁伝承の一つであったものが次第に縁起と結びつき、鎌倉時代には縁起と組にして語られる形が定着したことが確認される。

第2章「南円堂創建説話の形成」では、興福寺にある南円堂の縁起を取り上げた。興福寺は藤原氏の氏寺であり、また藤原氏の氏社には春日社がある。ここでは南円堂縁起が、春日明神や藤原氏の権威と結びつきながら形成されてゆく過程について論じた。

南円堂の縁起は、南円堂創建時に春日明神が現れ「ふだらくの南の岸に堂立てて今ぞ栄えん北の藤波」という、藤原氏の繁栄を寿ぐ和歌を詠じたとする説話である。縁起形成初期においては、和歌を詠じる者を老翁や子供、鬼などとする説があり、歌の形も様々であったことが確認できる。しかし十二世紀に入ると、春日明神が老翁の姿で現れて「ふだらくの」歌を詠んだとする説が次第に定着していったことがわかる。この時期は、興福寺と春日社がともに藤原氏の下に一体化していった時期と重なっている。興福寺と春日社の結びつきが、南円堂縁起に春日明神を登場させる原因になったと考えられる。

さらに同時期に、南円堂を供養した日に数名の源氏姓の公卿が死亡したという説話も発生している。この説話は藤原氏の信仰の厚かった南円堂に、藤原氏と対立していた源氏姓の者が長く入堂しなかった事実と関わりがあると考えられる。このように南円堂縁起の形成は、藤原氏・興福寺・春日社の相互のつながりと深く関わっているのである。

第3章「南円堂鎮壇をめぐる説話」では、やはり興福寺南円堂の縁起を取り上げ、創建の際に壇を築き堂を立てた後に土壇を鎮める「鎮壇」の儀式をめぐる説話の展開と、真言宗の一派である三宝院流との関係について論じた。

中世には南円堂の鎮壇に関係する様々な説話が生み出された。南円堂に関する記録や説話を追っていくと、南円堂縁起形成の初期から空海が創建に関与したとされており、空海が鎮壇の儀式を行ったとも考えられていたようである。これにより南円堂縁起は、藤原氏の繁栄とともに空海の験力を説く説話としても伝えられていった。

空海の南円堂鎮壇は、平安時代から中世にかけて数多く作られた空海の伝記「弘法大師伝」の主要な説話の一つとして継承されていった。さらに、空海が鎮壇の際に埋めたとする鎮壇具をめぐる説話が誕生し、この鎮壇具が後世になって掘り出されたという記録まで現れた。単なる伝承だけではなく、実際に「もの」によってそれが証明されるということは、空海に対する、また南円堂自体に対する信仰を高めるのに絶大な効果を発揮したと考えられる。さらに鎮壇具発見の説話は発展し、この鎮壇具が掘り起こされたときに、醍醐寺遍智院の義範僧もただ一人がその内容について答えることが出来たという説話が、いくつかの「弘法大師伝」に登場する。同様の説話を載せる伝書などから検討するに、このような説話は真言宗の一派である東密小野流の一つ三宝院流が、自身の流派が空海の正統を継ぐ者であることを主張するために生み出し継承していたと推測される。このように寺院縁起が、それを必要とする組織によって担われ展開していった様子をたどることができる。

第4章「乙護法説話と背振山縁起」では、乙護法という童子の活躍する説話を検討することで、天台宗の中心地比叡山と地方の寺院縁起との関わりについて論じた。

乙護法とは護法童子の一人で、護法童子とは仏法を守護する天童である。護法童子が修行者に仕えて活躍する説話は数多く残されているが、特に天台宗の僧である書写山の性空と比叡山の皇慶に仕えたとする乙護法にまつわる説話は多い。乙護法の説話は書写山と比叡山を中心に多く生み出され、また同一の説話が双方で伝承されていることから、乙護法の説話をめぐる書写山と比叡山の交渉があったことがうかがえる。特に両者を繋ぐものとして、乙護法は始め性空のもとに仕えるが、乱暴な行いのために追放され、次いで皇慶に仕えるが再び追放されたとする説話が残されている。そして、皇慶のもとを追い出された乙護法の後日譚を描いた説話が、天台宗の僧によって十六世紀に編纂された『法華経直談抄』に記されている。それによると、最後に乙護法は九州の背振山に住したというのである。ここから中世における比叡山と背振山との関係をうかがうことができる。

十五世紀に天台宗の僧が編纂した教学書『溪嵐拾葉集』には、「背振山縁起」が二度も引かれ、そこでは弁財天とその子供の乙護法が背振山に現れたことが記されている。性空や皇慶も入山したことのある背振山は、平安時代から天台宗の修験道場として栄えていたのであり、中世には弁財天と乙護法が祀られていた。比叡山でも中世には弁財天信仰や護法童子信仰が盛んであったことから、弁財天や護法童子の由来を説く背振山縁起が重要視され、これを利用したのであろう。そしてこの縁起の影響の下、延暦寺近辺で乙護法の後日譚は形成されたと考えられる。以上のことから、延暦寺が地方の寺院縁起も利用しながらその教学を形成し、またそれによって新たな説話が生み出されていた様子がうかがえる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、その第一編で仏教説話と和歌との関わりを、第二編で寺院縁起の展開について考察する。日本の仏教説話は、今日、比較的盛んに研究が進められている分野ではあるが、説話に引かれる和歌について、その仏教的意味を特段に考察するような研究は稀れであり、また寺社縁起は説話を含む資料として説話研究に利用されることは多いものの、縁起そのものの歴史的展開が詳細に分析される機会はほとんどない。本論文は、仏教説話研究のその手薄な部分について、新たな角度からの考察を試みるものである。

第一編は、鎌倉時代に成立した『宝物集』に関する研究である。『宝物集』は説話事典とも言えるほど多くの説話を類聚し、また歌集としての性格をもつほどに数多くの歌を引用、配列する。論者は、第一章において、従来、その和歌が説話とは別個に扱われ、仏教説話集における和歌の役割についての考察がなかったことを指摘し、『宝物集』中の和歌が、実は仏道の教化に資するものとして利用されたことを論証した。一首一首のその考察には若干論じ足りない点も見られるが、論者が述べるように、当時、仏道を大衆に対して教化する唱導活動において、仏説の和らげの中に和歌がしばしば引用されたことを考えるならば、『宝物集』中の和歌に仏教的教訓が含まれるというその指摘は、当然のことと首肯されなければならない。ただし、言うまでもなく、仏教と和歌とは、その起源・本質ともに全く異なるものであり、たとえば「不邪淫戒」を説くために、道ならぬ恋を平然と詠う和歌を引くこと、あるいは「不飲酒戒」「不偷盜戒」を示すために、飲酒や窃盜を詠うことのない和歌を利用することは、元来が無理なことである。そのような無理を犯してまで、なぜ『宝物集』は和歌をかくも大量に引用するのか。それは改めて問題とされるべきことであろう。それに関わって、「狂言綺語も法の声」というような考え方が何如に成立したかについても、本格的な考察があるべきであった。

第二章は、『宝物集』の日蔵上人蘇生譚に引かれる和歌を論じる。日蔵が地獄で対面した醍醐天皇が、冥途では俗界の貴賤は意味がなく、罪の有無こそが問われると述懐する話に、本来その説話と関わりがなかった歌「いふならく奈落の底に入りぬれば利利も首陀もかはらざりけり」が書き加えられ、それ以降、その歌と説話とが固く結びつき、さまざまな説話集、軍記、物語に踏襲されてゆくことを紹介する。仏の教えを説くために和歌が用いられたことを、絶好の例によって示したのである。

第二編は寺院縁起の諸相について詳細に分析する。寺院の縁起資料は、従来、文学と歴史の研究では、それを説話研究や寺院史研究の資料とこそすれ、その全体像を描こうとする試みは少なかった。本論文は、それぞれの寺院縁起の展開を史的にたどり、その変容の意味を明らかにしようとするものである。

その第一章は、石山寺が東大寺の末寺としての存在から徐々に独立してゆく過程が石山寺の創建説話の変容に反映されたことを、第二章は興福寺南円堂の縁起が春日明神、藤原氏の権威と結びつきながら形成されたことを詳述した。その二つは特別に目新しい指摘とは必ずしも言えないかも知れないが、第三章で、南円堂縁起に関わる弘法大師の説話が真言宗の一派三宝院流によって形成されたことを論じ、また第四章で、九州の背振山の縁起が延暦寺によって利用され、それが中世比叡山における弁財天信仰を背景にすることを説いたことは、寺院縁起が特定の宗派によって、特定の目的のもとに作り出され、作り変えられ、維持されたかを具体的な例によって示す大変重要な論証であった。それらの論は、全体に個々の複雑な現象を整理するのに忙しく、中世に於ける弘法大師信仰の意味、比叡山の弁財天信仰の意味を考察するまでには十分に力及んでいない印象もあるが、中世寺院縁起の未整理の龐大な資料群から、このような興味深い問題を発見し、それを通して寺院の信仰の歴史的展開を具体的に描き出した慧眼と手腕は、高く評価されなければならない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成十六年九月十三日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。